37

世界文学全集

異邦人／ペスト／転落／誤解

カミュ／窪田啓作・宮崎嶺雄
佐藤朔・加藤道夫 訳

世界文学全集　37

異邦人／ペスト／転落／誤解

アルベール・カミュ

訳者　窪田啓作／宮崎嶺雄／佐藤朔／加藤道夫

Originally copyrighted by Librairie Gallimard, Paris. This book is published in Japan by arrangement with Librairie Gallimard through the Bureau des Copyrights Français in Tokyo.

発行／1971年6月30日　　7刷／1977年8月15日
発行者／佐藤亮一　東京都新宿区矢来町71
発行所／株式会社・新潮社　東京都新宿区矢来町71
電話東京(03)266-5111　振替東京4-808　郵便番号162
印刷所／株式会社光邦　製本所／神田加藤製本所
本文用紙／三菱製紙株式会社
製函／中田製函株式会社
函貼・扉・見返／特種製紙株式会社
表紙クロス／ダイニック株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします　Printed in Japan 1971

目次

異邦人 …… 3
ペスト …… 91
転落 …… 369
誤解 …… 463
アルベール・カミュ …… 531

L'Etranger

La Peste

La Chute

Le Malentendu

by

Albert Camus

Originally copyrighted by Librairie Gallimard, Paris.
Copyrighted in Japan by Shinchosha, Tokyo.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

異邦人

第一部

1

きょう、ママンが死んだ。もしかすると、昨日かも知れないが、私にはわからない。養老院から電報をもらった。

「ハハウエノシヲイタム、マイソウアス」これでは何もわからない。恐らく昨日だったのだろう。

養老院はアルジェから八十キロの、マランゴにある。二時のバスに乗れば、午後のうちに着くだろう。そうすれば、お通夜をして、明くる日の夕方帰って来られる。私は主人に二日間の休暇を願い出た。こんな事情があったのでは、休暇をことわるわけにはゆかないが、彼は不満な様子だった。「私のせいではないんです」といってやったが、彼は返事をしなかった。そこで、こんなことは、口にすべきではなかった、と思った。とにかく、言いわけなどしないでもよかった。むしろ彼の方が私に向かってお悔やみをいわなければならないはずだ。が、彼が実際悔やみをいうのはもちろん明後日、喪服姿の私に出会ったときになろう。差当りは、ママンが死んでいないみたいだ。埋葬が済んだら、反対にこれはれっきとした事柄となり、すべてが、もっと公けのかたちをとるだろう。

私は二時のバスに乗った。ひどく暑かった。いつもの通り、レストランで、セレストのところで、食事をした。みんな私に対して、ひどく気の毒そうにしていた。「母親ってものは、かけがえがない」とセレストは私にいった。私が出掛けるとき、みんな戸口まで送って来た。エマニュエルの部屋へ、黒いネクタイと腕章を借りに登ってゆかねばならなかったから、私は少少目が回った。エマニュエルは、数カ月前叔父をなくしたのだ。

私はバスに遅れないように走った。私が眠くなったのは、きっと、こんなにいそいだり、走ったりしたためだった。それに加えて、車体の動揺やガソリンのにおいや、道路や空の照り返しのせいもある。ほとんど

車の走るあいだじゅう眠り続けた。眼が覚めたときには、軍人に寄りかかっていた。彼は私に微笑して、遠くから来たのか、と尋ねた。別に話したくもなかったから、私は「そうです」といった。

養老院は村から二キロのところにある。私はその道を歩いた。すぐにママンに会いたいと思ったが、門衛は院長に会わなければならない、といった。彼の手がふさがっていたので、しばらく待った。その間じゅう、門衛が話しかけて来た。それから院長に会った。その事務室で彼は私を迎えた。小柄な老人で、レジオン・ドヌールを着けていた。明るい眼で、彼は私を見た。それから私の手を握り、どうして手を引き込ませようかと困ったほど長く、離さずにいた。彼は書類の頁をめくって、「マダム・ムルソーは三年前にここに来られた。あなたはそのたった一人の御身寄りでしたね」といった。何か私をとがめているのだと思い、事情を話し出したが、彼は私をさえぎって、「弁解なさることはありません。あなたのお母さんの書類を拝見しました。あなたにはお母さんの要求をみたすことができなかったわけですね。あの方には看護婦をつける必要があったのに、あなたの給料はわずかでしたから。でも結局のところ、ここにおられた方が、お母さんにも御幸せでしたろう」「その通りです、院長さん」と私はいった。「ここには同じ年配の方、お友だちもあったし。そういう方たちと、古い昔の思い出ばなしをかわすこともできたし。あなたはお若いから、あなたと一緒では、お母さんはお困りになったでしょう」と院長は付け加えた。

それは事実だ。家にいたとき、ママンは黙って私を見守ることに、時を過ごした。養老院に来た最初の頃にはよく泣いた。が、それは習慣のせいだった。数カ月たつと、今後はもしママンを養老院から連れ戻したなら、泣いたろう。これもやっぱり習慣のせいだ。最初私がほとんど養老院へ出掛けずにいたというのも、こうしたわけからだ。それに、また日曜日をふいにすることになるし、――バスに乗ったり、切符を買ったり、二時間も歩いたりすることが面倒なせいもあったのだが。

院長はなおも話し続けたが、私はほとんど聞いてはいなかった。やがて、「お母さんにお会いになりたい

でしょう」と彼がいった。私は何もいわずに立ち上がった。彼は先に立って戸口へ向かった。「死体置場の小部屋へ移して置きましたから。他のひとたちに刺激を与えないようにするためです。在院者の誰か一人死ぬたびに、他の連中は二、三日神経を立てます。すると、ことが面倒になるので」と、階段で彼は説明した。われわれは中庭を横切った。そこには大勢の年寄りがいて、少しずつかたまり合って、しゃべっていた。われわれが通るとき、彼等は黙ってしまったが、われわれが通り過ぎると、またおしゃべりがはじまった。ぺちゃくちゃ、ぺちゃくちゃ、鸚鵡のおしゃべりみたいだった。小さな建物の戸口のところで、院長は私と別れた。

「ここで失礼します。ムルソーさん。御用は何でもおっしゃって下さい。私は事務室におりますから。原則として、埋葬は朝の十時と定まっています。あなたもお通夜をなされるでしょう。それからもうひとこと、お母さんはよくお友だちに、宗教に則して埋葬されたい、と希望をお漏らしになったようです。手はずは万端整っております。ただそれをあなたにお伝えしておきたかったので」私は彼に礼をいった。ママンは、無神論者ではなかったが、生きているうちは決して宗教のことを考えていなかった。

私はなかへ入った。大層明るい部屋で、石灰が白く塗られ、一枚の焼絵ガラスが入っている。いすとX型の台が置かれていて、部屋の中央に、その台の二つが、ふたのしてある棺をささえている。申しわけばかり打ちこんだネジが、きらきら光り、くるみ塗りの板からとびでているのだけが眼についた。棺のかたわらには、どぎつい色の布を頭に巻きつけた、白い上っ張り姿のアラビア人の看護婦が一人いた。

このとき、私の背後に門衛が入って来た。走って来たに違いない。少し吃りながら、「こいつはふたがしてあるが、あんたが御覧になるなら、ネジを抜きましょう」という。彼は棺に近よったが、私は彼をひきとめた。「御覧にならないですか」というから、「ええ」と私は答えた。彼はやめた。こういうべきではなかったと感じて、私はばつが悪かった。ちょっとして、彼は私を見つめ、「なぜです」と尋ねたが、いかにも不思議だという様子で、別に非難の色はなかった。「理

由はありません」と私はいった。彼は白いひげをひねりながら、私の方を見ずに、「わかるよ」とはっきりいった。明るい青の、美しい眼をしていて、顔色はやや赤味がかっていた。彼は私にいすをすすめ、自分も私の少しうしろに腰掛けた。看護婦が立ち上がって、出口の方へ向かった。このとき、「あの人は腫物ができているんだ」と門衛が私にいった。私はわからなかったので、看護婦を眺めた。眼の下に繃帯をしていて、それが頭を一まわりしているのが、わかった。鼻の高さで、繃帯は平らになっている。その顔は、繃帯の白さしか、眼に映らなかった。

看護婦が出て行くと、門衛は「あんたをひとりにしよう」といった。自分がどんな仕ぐさをしたか知らないが、彼は出て行かずに、私のうしろに立っていた。この私の背中の人影が、私は気になった。部屋には午後の終わりの美しい光があふれていた。二匹のモンクマバチが、窓の焼絵ガラスにぶつかって、うなっていた。そして睡気がひた寄せて来るのを感じた。門衛の方を振り向かずに、私は「ここに来てから大分になりますか」といった。即座に彼は「五年でさ」と答えた。まるで、ずっとこの問いを待ち受けていたかのように。

それから彼は大いにしゃべった。この男に、マランゴの養老院で、門衛として終わる、とでも前にいいでもしたら、定めし妙な顔をしただろう。彼は六十四歳で、パリッ子だった。この時、「ああ、あなたはこの土地のひとではないんですね」と私は彼の言葉をさえぎった。それから、院長のところへ連れてゆく前に、彼がママンのことを口にしていたのを思い出した。――いそいで埋葬せねばならない。野原は暑い、この地方では特に暑いから、と彼はいっていたのだ。また、この男は、自分が、かつてパリで生活したことがあり、パリ生活を忘れかねている、と私にうったえたのも、そのおりだった。パリでは三日、時には四日も、死者と一緒にいることがあるが、ここではその暇はない。柩車を追うて走らねばならぬということしか考えられない。あのとき、女房が門衛にいった。「お黙んなさい。この方に申し上げるべきことじゃないよ」老人は赤くなって、申しわけをいった。私はなかに入っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

て、「いや、構わないよ。構わないよ」といった。彼の話は正当だし面白い、と思った。

死体置場の小部屋で、彼は困窮者として養老院に入って来たのだと私に告げた。まだ役に立つと思ったので、この門衛の仕事を申し込んだのだ。要するに彼は一人の在院者にほかならぬ、ということを私は注意してやった。彼は、違う、といった。自分より年少の者も相当いるのだが、その在院者たちについて語るとき「あの連中」とか「他の連中」とか、もっとまれには「老人連」とかの言葉を使うのが、ひどく印象に残った。しかし、それはもちろん同じことではない。彼は門衛なのだし、ある限度において、彼は他のひとたちの上にちからを及ぼすのだ。

このとき看護婦が入って来た。夕暮が、にわかに降りて来た。じきに夜が焼絵ガラスの窓に厚くかぶさった。門衛がスイッチをひねると、急に光がはねかかって来て、眼が見えなくなった。門衛が食堂へ行って食事をするようにすすめた。が、腹がへってはいなかった。そこで彼はミルク・コーヒーを持って来ようと申し出た。私はミルク・コーヒーが大好きだから、承知した。しばらくして彼はお盆を持って戻って来た。私は飲んだ。今度は煙草をすいたいと思った。が、ママンの前でそんなことをしていいかどうかわからなかったので、躊躇した。考えて見ると、どうでもいいことだった。私は門衛に一本煙草をやり、われわれは煙草をくゆらせた。

しばらくして、「あの、あんたのお母さんのお友だちも、お通夜に見える。そういうしきたりなんで。いすとブラック・コーヒーをとりにいかなきゃならない」と彼はいった。明りを一つ消していいかと私は尋ねた。白壁のうえの、光のきらめきが、私を疲らせたからだ。彼はそれはできないといった。配線がそういう風になっていたのだ。全部つけるか、全部消すかだ。私はもう彼の方へ大して注意を向けてはいなかった。彼は出てゆき、戻って来て、いすを並べた。その一脚の上に、コーヒー沸しをまんなかにして、茶碗を積み重ねた。やがて、彼は、ママンの向こう側、私の正面に腰をおろした。看護婦も、部屋の奥に、背を向けて、腰かけた。彼女が何をしているのか、わからなかった。が、腕の動きようからして、編物をしている

のだろうと思われた。穏かな陽気と、コーヒーで体が暖まった。開け放たれた戸口から、夜と花とのにおいが入って来た。少しうとうとしたと思う。

すれ合う音で、眼がさめた。眼をつぶっていたため、部屋は、よけい白い光にきらめくように見えた。私の前には、影ひとつなかった。どの物体も、どの角度も、いずれの曲線も、眼を傷つけるほど鮮明に描き出されていた。ママンの友だちが入って来たのは、この時だ。全部で十人ばかりで、黙ったなり、このまばゆい光のなかへ、すべりこんで来た。彼らは腰はおろしたが、どのいすも全然きしむ音を立てなかった。私はこれまで人間を見たことがないみたいに、彼らをよく見た。顔付きや服装のどんな細かな隅々までも、見のがしはしなかった。けれども、声が耳に入らなかったので、現実に彼らがそこにいるとは、信じにくかった。女はほとんどみなが前掛けをしていた。胴体をしめつける紐が、つき出た腹を一層目立たせていた。私はこれまでばあさんたちがどれほど腹がつき出ているか、気に留めたことはなかったのだ。男の方は、ほとんどみんなやせて、杖をついていた。その顔だちで注意をひいたのは、そこには眼らしいものが見つからないということで、皺また皺のまんなかに、わずかに、にぶい光があるだけだった。彼らが腰をおろしたとき、大部分は私をながめ、窮屈そうにうなずき、歯のない口で唇を深くかみしめていた。彼らがあいさつをしたのか、単なる習慣的な痙攣なのか、私にはわからなかった。やはり彼らは私にあいさつしたのだと思う。このとき、彼らがみんな、私の真向かいにすわって、門衛を囲んで頭をゆすっているのに気がついた。彼らが私を裁くためにそこにいるのだ、というばかげた印象が、一瞬、私を捕えた。

すこしたって、女の一人が泣き出した。彼女は二列目で、仲間のひとりの陰にかくれて、私にはよく見えなかった。小さな声で、規則的に、泣いた。泣きやむときを知らぬように見えた。他のひとたちは泣き声を聞かない振りをしていた。しおれ切って、陰気で、黙りこくっていた。彼らは棺だの、自分の杖だの、他の何かをながめていた。が、一点をみつめていたのだ。女は相変わらず泣き続けていた。その女を知らないので、私は大層驚いた。もう泣き声を聞きたくないと思

った。でもそれをあえて女にいい出す勇気はなかった。門衛が女の方へ身を傾けて、話をした。が、女は頭を振り、口ごもりながら何かいい、そして、同じ規則正しさで泣き続けた。門衛がこのとき私の方へ来て、側にすわった。かなりたってから、私の方を見ずに、彼はこう教えてくれた。「あの女はあんたのお母さんと親しくしていた。お母さんがここではたった一人の友だちなので、もうこれで友だちがなくなってしまったといっているんだ」

私たちは長いことこうしていた。女の溜息やすすり泣きもだんだん間遠くなった。女はひどく鼻をすすった。が、やがて、それもとうとう聞こえなくなった。私はもう睡くはなかったが、疲れて、腰が痛んだ。今となると、これらのひとたちの沈黙が、私を苦しませた。ただ間を置いて、奇妙な音が聞こえたが、それは何だかわからなかった。しまいに、数人の老人が、頬の内側をしゃぶって、この変な舌打ちをやっていることがわかった。彼らは自分では気づいていなかった。それほど自分の考えのなかに引きこまれていたのだ。彼らのまんなかに横たわるこの死者は、彼らの眼には何ものをも意味しないのではないか、という気すらした。が、これは間違った印象だった、と今では思う。

門衛の手で配られたコーヒーを、われわれはみんな飲んだ。それ以後のことは、もう知らない。夜が更けた。ふと私が眼をあけて、老人たちが互いにもたれ合って眠る姿を見たのを、覚えている。ただ、一人だけ、杖を握りしめた手の甲にあごをのせて、まるで私の目覚めるのを待っていたかのように、じっと私の方を見つめていた。それからまた私は眠った。ますます腰が痛んで来たために、また眼がさめた。焼絵ガラスの向こうに陽がのぼっていた。しばらくして、老人の一人が眼をさまし、ひどく咳いた。彼は大判の格子縞のハンカチのなかに痰を吐いた。痰を吐くたびに引きむしるみたいだった。この老人のおかげで、他のひとが眼をさました。門衛が出掛けようといった。彼らは立ち上がった。このやっかいな通夜のために灰色の顔をしていた。出てゆくとき、驚いたことには、ひとり残らず私の手を握った——まるで、一言もかわさなかったこの一夜のために、われわれの親しみが増したかのように。

私は疲れていた。門衛が自分の部屋へ連れて行ってくれたので、ちょっと身づくろいをすることができた。私はまたミルク・コーヒーを飲んだ。大へんうまかった。私が出掛けたとき、陽は上り切っていた。マランゴを海から隔てる丘々の上に、空はすっかり紅を帯びていた。丘々を越える風が、ここまで塩のにおいを運んで来た。これから美しい一日が開かれようとしていた。久しいこと私は田舎へ行ったことがなかった。ママンのことがなかったら、ぶらぶら歩くのは、どんなにうれしかろう、と私は感じた。

しかし、中庭のすずかけの木の下で、私は待った。さわやかな大地のにおいをかいだ。もう睡気はなかった。事務所の同僚のことを思った。こんな時刻に、みんなは仕事にゆくために起きるのだ。私にとって、それはいつでもいちばんつらい時刻だった。なおしばらくこんなことがらを考えていたが、建物の内部に鐘が鳴りわたると、われに返った。窓のうしろでごたごた動く音がしていたが、やがてすべては静かになった。太陽はいよいよ上り、私の足もとをあたためだしていた。門衛が中庭を横切って来て、院長が呼んでいるといった。私は彼の部屋へ行った。彼は私に数通の書類に署名をさせた。彼は縞ズボンに黒い服を着ているのを見た。彼は電話を手にとって、「葬儀屋がしばらく前から来ています。柩をしめさせようと思いますが。その前にお母さんにお別れをなさいますか」と私に尋ねた。いいえ、と私はいった。彼は、声を低くして、「フィジャク、出掛けてもいいといいなさい」と電話で命じた。

それから院長は自分も埋葬に立ち会うといった。私はお礼を述べた。彼は机の後に腰をおろして、短い足を組んだ。あなたと自分と付添いの看護婦だけでゆくのだと彼は私に告げた。原則として、在院者は埋葬に参列してはならない。院長はお通夜だけは許したのだ。「これは人情ですからね」と彼は力をこめていった。しかし、この場合には、ママンの年老いた友人《トマ・ペレ》に、葬列に従うことの許可を与えていた。ここで、院長が微笑した。「おわかりでしょう。少々子供っぽい感情です。でも、彼とあなたのお母さんとは、しょっちゅう一緒でした。養老院では二人をからかい、ペレに向かって、『あれがあなたの許嫁だ』

などといったものです。彼は笑っていましたし、これはふたりを喜ばせたのです。そして、マダム・ムルソーの死が彼に深い印象を与えたことは事実です。この許可を拒絶すべきだとは思いませんでした。が、医師の勧めに従って、昨日のお通夜は彼に禁じておいたのです」と彼はいった。

われわれはかなり長いこと黙っていた。院長が立ち上がって、事務室の窓からながめた。と、間もなく、「そら、マランゴの司祭がお見えだ。早目に来られたのだ」といった。村の教会に行くには、歩いて少なくも四十五分はかかるだろうと前もって私にいい渡した。われわれは下へ降りた。建物の前には、司祭と合唱隊の二人の子供がいた。その一人は香炉をささげ持ち、司祭は銀鎖の長さを調節するためにその子の方へ身をかがめていた。われわれが着いたとき、司祭は身を起こした。彼は「わが子よ」と私を呼び、二言三言いった。彼は入って来た。私は彼につづいた。

柩のネジが深く打ち込まれ、部屋には四名の黒い服の男がいるのを、私は一目で悟った。車が道で待っていると院長が私に伝えるのと、司祭が祈りをはじめるのとを、同時に聞いた。このときから、万事速かに進んだ。男たちが布の掛かった柩の方へ進み出た。司祭とそのお伴、院長と私とは外へ出た。戸口の前に、私の知らない婦人がいた。「ムルソーさんです」と院長がいった。この婦人の名は聞かなかった。ただ受持の看護婦だということだけを了解した。彼女は微笑も見せずに、骨張った長い顔を傾けてお辞儀をした。それから死体を見送るために、われわれは並んだ。われわれは人夫の後に従い、養老院を出た。戸口の前に、車がいた。ニスを塗って、細長くピカピカしたその車は、筆入れを思わせた。そのかたわらに、葬式の宰領がいた。おかしな服を着た小男だ。それから、いかにもぎごちない恰好の老人が一人。それがペレ氏だと私は悟った。彼は、天辺のまろく、縁の広いソフトをかぶり（柩が戸口を通るときにはそれを脱いだ）その服はといえば、ズボンの裾が靴の上までたれさがり、おまけに、白い大きな襟のついたシャツに対して、黒いネクタイは、あまり小さ過ぎた。黒いいぼのくっついた鼻の下で、唇が震えていた。細い白髪のあいだから、たるんで、縁のくずれた、妙な耳がのぞいていた。蒼

白な顔のなかの、この耳の血のように赤い色が、印象的だった。宰領がわれわれの位置を定めた。司祭が先に立って歩いた。それから柩車。その回りに四人の男。うしろに院長と私。行列の終わりに、受持の看護婦とペレ氏。

空には既に陽の光が満ちていた。それは大地にのしかかって来て、暑さは急速に増した。なぜだかわからなかったが、われわれは歩き出すまでに、ずいぶん長く待った。喪服を着ていて、暑かった。小柄の老人は帽子をかぶっていたが、また改めてそれを脱いだ。私はちょっと彼の方を向いていた。院長が彼のことを話し出したとき、私は彼を眺めていた。しばしば母とペレ氏は、夕方、看護婦に付き添われて、村まで散歩に出た、と院長はいった。私は自分の周囲の野原をながめた。空に近く、丘々まで連なる糸杉の並木、このこげ茶と緑の大地、くっきりと描き出された、まばらな人家——これらを通して、私はママンを理解した。夕暮は、この地方では、憂愁に満ちた休息の一刻にちがいない。今日、あふれるような太陽は、風景をおののかせ、非人間的に、衰弱させていた。

われわれは歩き出した。このとき、ペレが軽くびっこを引くことに気づいた。車はだんだん速度を増し、老人は遅れた。車についた男の一人もやはり追い抜かれて、今や私と並んで歩いていた。太陽が空にのぼるその速さには驚かされた。ずっと前から、野原は虫の声と葉ずれの音にざわめいていたのに気づいた。汗が頬を流れた。帽子を持たなかったので、ハンカチであおいだ。葬儀屋がそこで何かいったが、私にはわからなかった。同時に、彼は右手で鳥打帽の端を持ちあげながら、左手につかんだハンカチで、あたまを拭うた。「何です?」と私はいった。彼は空の方をしめしながら、「ひどい照りだ」と繰り返した。「うん」と私はいった。しばらくして、彼は「あれはあんたのお母さんかね」と尋ねた。「ええ」とまた私はいった。「年とっていたかね?」正確な年齢を知らなかったから、「まあね」とだけ答えた。それから、彼は黙ってしまった。振り返ると、五十メートルばかりうしろにペレ老人の姿が見えた。手にもったソフトを振りながら、いそいでいた。また院長をながめた。彼は何一つ無駄な仕ぐさをせず、もったいぶって歩いていた。汗のし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton